

# 映画配給のグローバル化とアジア

——マニラ映画館史 1909-1914

笹 川 慶 子

## 1 諸言

アジアにおけるアメリカ映画の台頭は、これまで第一次世界大戦末期、もしくは大戦後とされてきた<sup>1)</sup>。しかし今回、マニラの映画興行史を調査して明らかになったのは、そのずっと前からすでにアメリカ映画のアジア進出ははじまっていたという事実である。

1909年、フランス、パテ社のマニラ市場進出は、シンガポールがそうであったように、欧州映画による市場の独占状態を生み、映画館の開場ラッシュを引き起こす。だが、マニラとシンガポールでは、その様相は明らかに異なる。なぜならマニラの場合、パテ社上陸後すぐに、アメリカ映画専門の高級映画館が誕生し、マニラ映画興行界を牽引しはじめるからである。このとき重要な役割を果たしたのは、在マニラのアメリカ人であり、アメリカ製品を扱う貿易商であり、アメリカの軍人たちであった。とりわけ、マニラで上映されるアメリカ映画の主流が、モーション・ピクチャー・パテンツ・カンパニー Motion Picture Patents Company (以下 MPPC) のライセンス映画から、ユニヴァーサル社に代表される MPPC ではない非ライセンス映画へ移行すると、その市場勢力は動かし難いものとなる<sup>2)</sup>。

本研究の目的は、欧州とアメリカを起源とするグローバルな映画配給網がアジアに伸びる20世紀初頭のマニラ映画市場を例として、映画がアジアに浸透していく複雑な過程の一端を、ローカルな映画文化とグローバルな映画文化の相互交渉による変容の重層的なダイナミズムとして捉えることにある。具体的に

は拙稿「パテ社のマニラ進出と映画館——マニラ映画興行史 1909-1910」<sup>3)</sup>を踏まえて、パテ社がマニラに進出したあとの1909年から1914年までのマニラ映画市場の変容を映画館およびその配給興行の面から明らかにする。それによってマニラにおける映画文化の形成は、映画産業が興行を中心に急速に発展する時期と、フィリピンの統治がスペインからアメリカに変わる時期が重なるがゆえに、他のアジアの国や地域とは異なる展開を見せていたことがわかるだろう。同時にまた、20世紀初頭のマニラの映画文化がオペラやヴォードヴィルなど劇場文化、シンガポールなどアジア内の開港都市、世界の海運ルートなどとも密接に関わっていたことが見えてくるだろう。

本研究の調査には、主に京都大学東南アジア研究所図書室が所蔵する『マニラ・タイムズ』*The Manila Times*を使用した。それ以外では『マニラ・アメリカン』*The Manila American*や『フィリピン・フリー・プレス』*Philippine Free Press*など、フィリピンで発行された新聞や雑誌、書籍、郷土史料、地図を用いた。また、『ムーヴィング・ピクチャー・ワールド』*The Moving Picture World*など、アメリカの映画業界誌やアメリカ内務省島嶼局刊行物など、フィリピンに関するアメリカで発行された史料も参照した。さらに、19世紀末から20世紀初頭のフィリピンに関する論文や政府史料を収集したアメリカ、ミシガン大学図書館東南アジア・コレクションをデジタル化した『ユナイテッド・ステイツ・アンド・イッツ・テリトリイズ』*The United States and its Territories 1870-1925: The Age of Imperialism*も活用した。ただし、どの史料も、記述の揺れや情報の曖昧さが散見され、信用できる史料はさほど多くない。なお、マニラ映画産業に関する史料は、タガログ語、スペイン語、英語の三つの言語に分散しているが、本研究では主にフィリピンとアメリカ、日本にある英語の史料を調査分析した。

## 2 マニラの映画館開場ラッシュと棲み分け

1909年5月、パテ社がマニラに代理店を開業する。それによりマニラはグローバルな映画配給の網目に縫い取られる。市場にはパテ社の配給する映画が安

定的に流れ込み、映画館の開場ラッシュが起こる（これに関しては拙稿「パテ社のマニラ進出と映画館——マニラ映画興行史 1909-1910」にて論じた）。

パテ社上陸後、マニラの映画興行界を牽引する役目を果たすのは、2つの高級映画館——エンパイア Empire とソリーリャ Zorrilla ——である。エンパイアは、中流階級以上の家族向けにヴォードヴィルと映画の両方を興行していた高級劇場オルフェウム Orpheum が映画専門に転向し、1909年8月9日、劇場名を改称して再開場した映画館である。一方、ソリーリャは、オペラやサルスエラを興行していた演劇の劇場だったが、エンパイアに刺戟されて、アメリカ映画専門の映画館に転じた。

興味深いのは、この2つの高級映画館の誕生後、わずか2年のあいだに映画館が10館以上開場したことである。しかも、そのうち少なくとも7館は、1910年5月から1910年末までに開場している。いかにパテ社の進出がマニラの映画興行を急展開させたかがわかるだろう。そこで以下では、マニラにおける映画市場の変容を捉えるべく、1910年から1912年までに開場した映画館を、開場した順に辿っていく。

#### ◆アポロ劇場 Apolo Theater

1910年5月14日、エスコルタ Escolta 通り58-60番地に新たに開場した、席数470席の中規模映画館である<sup>4)</sup>。フランス映画を上映するのを売りにしていた。経営者はH・フランケル H. Frankel であった。1911年4月頃には、ヴォードヴィルと映画の両方を興行するようになり、1911年末には新聞広告が消える。

フランケルがアメリカの映画業界誌『ムーヴィング・ピクチャー・ワールド』の1910年12月3日号に寄稿した記事によれば、アポロは「パテ映画」しか上映しなかったという。しかし、勘違いしてはならないのは、フランケルのいう「パテ映画」とは、パテ社が製作した映画と解釈してはならない。それはパテ社によって配給された映画と解釈すべきである。なぜなら『マニラ・タイムズ』の上映広告を調査すればアポロが、エクレールなどのパテ以外のフランス映画やノルディスクなどのデンマーク映画、あるいはエジソンやバイオグラフ、ルー





アポロ劇場 (*The Moving Picture World*, Dec. 3, 1910)

ビンなどアメリカの MPPC 映画やインディペンデント映画社 Independent Moving Pictures (以下 IMP) など MPPC ではない映画も上映していたからである。したがって、フランケルのいうようにアポロがパテ社の配給する「パテ映画」のみ上映していたのであれば、パテ社は、パテ映画だけでなく、フランスやデンマーク、アメリカの映画も配給していたことがわかる。

この劇場の席料は50-30-20セントボと、当時の平均より少し高めである。上映時間は開場当初、夜7時30分から11時30分であったが、すぐに4時30分から11時に変更される。上映時間を早め、かつ長くしているのである。これはエンパイアやソリーリヤといった大きな高級劇場と興行の時間帯を変えることで、それらの劇場と同ランクの客層を狙ったか、あるいはまた、上映映画が主にフランス映画であることからマニラ在住のフランス人もしくは欧州人の要望に応じて、マチネー (matinée, 昼間の興行を指す) を行っていたとも考えられる。文化の異なる移民にあわせて多様な興行が共存していた点で、日本とは明らかに違う。

#### ◆マジェスティック劇場 Majestic Theater

アメリカ人興行師 A・W・バート・イヤースリィ A. W. Bert Yearsley (1877-1928) のオリエンタル映画社 Oriental Moving Picture Corporation が経営していた劇場のひとつである。アズカラガ Azcarraga 通り (現在のレクト大通りの一部) のビリビッド Bilibid 近くにあった。上映時間は夜7時30分から11時30分である。

マジェスティックがいつ映画興行をはじめたかは不明であるが、『マニラ・



タイムズ』に映画上映の広告が初めて掲載されるのは1910年8月15日である。姉妹劇場であるエンパイアと同じ枠内であった。おそらく、ヴォードヴィルか演劇の劇場からの転身であろう。

上映映画は最初、欧州とアメリカの混成プログラムであったが、しだいにアメリカ映画が多くなる。アメリカ映画はすべて、ヴァイタグラフやルービン、カレム、バイオグラフ、セリグ、エジソン、エッサネイなどMPPCのライセンス映画である。

マジェスティックの劇場は見事なコロニアル建築であった。『マニラ・タイムズ』の広告には、その外観と入場を待つ観客のイラストが掲載されている。描かれた観客の身なりを見ると、中流階級以上の白人らしき姿が多い。拙稿「パテ社のアジア進出と映画館」で述べたソリーリヤの場合と同じく、このイラストもまたマジェスティック劇場が理想とする観客のイメージにすぎない。だが、成人の男性と女性が多く描かれていたソリーリヤのイラストと比べ、マジェスティックのイラストは、女性や子供の姿が目立つ。このことからマジェスティックが家族を、その主なターゲットにしていたことが見てとれる。

マジェスティックは、エンパイアと経営者が同じである。だが、両者の興行内容を比べると、マジェスティックがエンパイアよりは上位に位置づけられていたことがわかる。たとえば、右の広告にあるように、パテ社のジャーナル映画「パテ・ジャーナル」*Pathe Journal*は、マジェスティックで



**THE MAJESTIC**  
January 5, 6, 7, & 8.  
1. *Scenes from Nevada.* (Comic)  
2. *Toribio Ceremonious.* (Colored)  
3. *Legend of the Myositis.* (Dramatic Art)  
4. *The Wayside Shrine.* (Comic)  
5. *Tinkled to Death.* (Comic)  
6. *The Last Days of Pompeii.* (Dramatic Art)  
7. *Toribio Receives.*  
**EXTRA**  
7th Edition of the Pathe Journal.

---

**THE EMPIRE**  
January 5, 6, 7, & 8.  
1. *Milk Industry in the Alps.* (Comic)  
2. *Won by a Holdup.* (Comic)  
3. *Troublesome Satchel.* (Comic)  
4. *The Farmer's Treasure.* (Dramatic)  
5. *Aeroplane Contest at Rheims.* (Dramatic Art)  
6. *The Two Sisters.* (Comic)  
7. *Toribio's Pants.* (Comic)  
**EXTRA**  
6th Edition Pathe Journal.

マジェスティック劇場とエンパイア劇場  
(*The Manila Times*, Jan. 5, 1911)

上映したあと、エンパイアで上映された。また、劇映画のなかにも、数はわずかだが、ヴァイタグラフ社の『モーゼ一代記』 *The Life of Moses* (1909) やパテ社の『アルプスの乳産業』 *Préparation et exportation du lait par la Société Laitière des Alpes Bernoises* (1909) といった映画がマジエスティックのあとにエンパイアで上映されていた。エンパイアがマジエスティックの上映映画を再上映することはあっても、その逆はない。再上映映画の数から判断してエンパイアは、けっしてマジエスティックの二番館ではないが、マジエスティックより下位に位置づけられた劇場であったことは確かである。

マニラ随一の高級劇場であったマジエスティックは、1913年1月8日を最後に、映画興行をやめ、ヴォードヴィルに転向する。アメリカから招いた芸人ハワード姉妹 Howard Sisters が1913年1月9日から17日まで公演したあと、『マニラ・タイムズ』の映画欄からはマジエスティックの広告が消える。その後もマジエスティックは、映画欄とは別の欄に広告をときどき掲載するが、その興行内容は、映画ではなく、ヴォードヴィルであった。たとえば1914年の新春興行は「ラグタイムの女王“ラグタイム・パルマ” アメリカの最新ヒットすべて」 *The Queen of "Ragtime Palma" All the Latest American Hits* である。このことからマジエスティックは、1913年1月以降、ヴォードヴィルに転向していたことがわかる。ほかに、ソリーリャやパズ Paz といった1909年にヴォードヴィルから映画に転じた先駆的な興行場が、1912年から1913年にかけてヴォードヴィルに戻る。1909年のパテ社マニラ上陸から約3年後、マニラの映画市場は、また新たな段階を迎えていたと考えられる。

#### ◆ロイヤル劇場 Royal Theater

1910年10月13日、スペイン統治時代の城塞都市イントラムロス内に新築開場した映画館である。サンタ・ポテンシアナ Santa Potenciana の119番地にあった。『マニラ・タイムズ』の初出広告には、112番地と記されているが、翌日からはずっと119番地である。また、当時の電話帳も119番地であることから119番地が正しいといえよう。経営者は、エンパイアやマジエスティックと同

じく、バート・イヤースリィ、支配人はB・J・バーグ B. J. Bergであった。席料は50-40-20-10セントボである。

この劇場の近くにはアメリカ陸海軍クラブがあった。おそらくアメリカ軍人の客が多かったと考えられる。フィリピンを舞台にアメリカ軍人とフィリピン娘の恋を描いたIMP映画『フィリピンの薔薇』*A Rose of the Philippines* (1910) がマニラで公開されたのも、この劇場である。公開日はアメリカ公開から約1年遅れた1911年1月19日であった。

開場時の上映プログラムは、アメリカ映画と欧州映画の混成だが、とくにMPPC映画を多く上映していた。たとえば、ヴァイタグラフ社の『召使娘の問題』*The Servant Girl Problem* (1905) やセリグ社の『法の影』*The Shadow of the Law* (1908) などである。また、開場当初は、数はわずかであるが、エジソン社の『枯葉の語る物語』*Tale the Autumn Leaves Told* (1908) など、同じ経営者であるエンパイアが上映した映画をここで再上映することもあった。

特筆すべきは、ロイヤル劇場がIMPやパワーズ、タンハウザー、ニューヨーク・モーショントピクチャー（バイソン）など、MPPCに属さない映画会社の非ライセンス映画を先駆的に上映している点である。IMPの第一回作である記念碑的な長編映画『ハイアワサ』*Hiawatha* (1909) もこの劇場が、アメリカ公開から約1年後である1910年11月28日に鳴物入りで興行した。このIMPという会社は、シカゴで映画交換会社を運営していたカール・レムリが映画製作に乗り出すため、1909年にニューヨークに設立した会社である。1912年には、IMPやパワーズなどMPPCに属さない映画会社が集まってユニヴァーサル社を設立する。ユニヴァーサル社は、アメリカにおけるMPPCの市場支配を崩壊させる新勢力の中核をなす重要な会社のひとつであった。したがってロイヤルは、アメリカ映画といえばMPPCのライセンス映画が主流であったマニラ映画市場において、アメリカ市場で台頭しつつあった非ライセンス映画——アメリカ初のインディペンデント映画——を他館に先駆けて積極的に上映し、アメリカ映画優勢の機運を生む前衛的役割を果たした劇場であったといえる。



### ◆ラックス劇場 Lux Theater

エスコルタ通りから1ブロック離れた繁華街プラザ・サンタ・クルーズ Plaza Santa Cruz にあった劇場である。こけら落とし興行は1910年11月4日であった。経営者のビセンテ・アルベルト Vicente G. Alberto は、フィリピン商工会議所の議員を務め、のちにパレス劇場 Palace Theater や リ ッ ツ 劇 場 Ritz Theater を開場し、パレス映画交換社 Palace Film Exchange を経営する人物である<sup>5)</sup>。席料は50-20-10セントボ、上映時間は5時台が多く、11時まで、毎週月曜日と木曜日に映画を取り替えていた。

上映映画はパテ映画が圧倒的に多い。たとえば、パテ社の『レ・ミゼラブル』

*Les misérables* (1912) は新聞に大広告を掲載し、4つのエピソードを4回に分けて上映している。パテ社以外の映画も、数は少ないが、上映していた。ただし、フランスのラックス社、ゴーモン社、イタリアのイタラ社やフィルム・ダール・イタリアーナ社、イギリスのキネトグラフ社など欧州映画がほとんどであった。アメリカ映画はバイオグラフ社、パワーズ社などの映画が、まれに上映されたにすぎない。ラックスの上映時間は、アポロ同様、他の館より早いのが特徴である。同館が主に欧州映画を上映していることから、その客筋は在マニラの欧州人であったと考えられる。



ラックス劇場 (*The Manila Times*, Nov. 27, 1912)

### ◆マガリャネス劇場 Magallanes Theater

1910年11月21日に開場した700席の中規模劇場である<sup>6)</sup>。場所はイントラムロス内のマガリャネス Magallanes 通り139番地にあり、同じ通りには合衆国俱

楽部 The United States Club があつた。席料は40-20-10セントボと、当時の平均的料金である。経営者は、元マニラ警察のフランク・H・グレット Frank H. Goulette とエディ・ティーク Eddie Teague であつた。二人は1909年8月に城塞都市イントラムロス内にアンダ Anda という小さな映画館を開場していたことがある。

開場当初は、パテ社の『アメリカ風結婚』 *Un mariage à l'américaine* (1909) や『貧しい老夫婦』 *Pauvres vieux* (1907)、フランスのエクレール社やスター・フィルム社、デンマークのノルディスク社、イタリアのアンブロジオ社やフィルム・ダール・イタリアーナ社、さらにアメリカ MPPC のバイオグラフ社や非 MPPC のタンハウザー社やネスター社などの映画を上映していた。

エンパイアなどマニラの主要な映画館は、欧米封切公開から1年前後遅れた映画を上映していたが、この劇場では、2, 3年遅れることもままあつた。このことから、他より古い中古映画を安く仕入れて上映していたと考えられる。映画のラインナップがバラバラなのもそのせいであろう。マニラのなかでは、ランクの低い映画館であつたといえよう。

#### ◆アイディアル劇場 Ideal Theater

プラザ・ゴイティ Plaza Goiti の29-31番地に1910年12月13日に開場した。席数900席の大きな劇場である<sup>7)</sup>。席料は50-40-20セントボ、当時のマニラでは高い方である。1910年12月15日の広告に「最新の欧米映画を上映」とある。とくにパテ社およびゴーモン社の映画が多かった。欧州で人気の高かったバイソンなどのアメリカ映画もときどき上映している。上映時間は4時30分から11時までである。アポロと同



アイディアル劇場の開場広告（*The Manila Times*, Dec. 13, 1910）



じく、マチネー興行を行っていることから、在マニラの欧州人が多かったと考えられる。

アイディアルは、アイディアル映画社 Ideal Moving Picture Company (1910年12月設立) が所有していた劇場である。アイディアル映画社は、ロンドンやパリ、バルセロナから映画を買いつけ、自社の映画館に配給した。アイディアル劇場の他にメトロポリタン、マガリャネス、パトリャ Patria などにも映画を配給していた。

#### ◆メトロポリタン劇場 Metropolitan Theater

キアポ教会広場 Quiapo Church sq. にあった収容人数1000人の大劇場である<sup>8)</sup>。正確な開場日は不明だが、1910年12月22日付の『マニラ・タイムズ』に「新開場」と記した広告が初めて掲載されることから、そのあたりで開館したと考えられる。したがって、この劇場は、1931年にエルミタ Ermita に新設された豪華な近代的劇場メトロポリタン大劇場とは別物である。

上映映画は最初、フランスのパテ社やスター・フィルム社、イタリアのロッシ社、デンマークのノルディスク社など欧州映画が多かった。1911年初頭から、ヴァイタグラフ社やパワーズ社などアメリカ映画—— MPPC であるなしにかかわらず——も混ぜて上映しはじめる。たとえば1911年3月1日にはアメリカ映画の『アンクルトムの小屋』 *Uncle Tom's Cabin* (1910) を鳴物入りで興行している。同時上映はフランス、クレール社やアメリカ、ヴァイタグラフ社の映画などであった。

#### ◆リベルタッド劇場 Libertad Theater

バート・イヤースリイのオリエンタル映画社が経営していた劇場のひとつ。エルミタのペドロ・ジル Pedro Gil 通りのハラン Harran 近くにあった。遅くとも、1911年9月までには開場している。席料は40-20-10セントボ。主にルービンやヴァイタグラフ、エジソンなど MPPC のアメリカ映画を上映していた。



#### ◆マドリッド劇場 Madrid Theater

バート・イヤースリイのオリエンタル映画社が経営していた劇場のひとつ。マニラの繁華街から少し離れたサン・ニコラス San Nicolas のマドリッド通りにあった。遅くとも、1911年9月までには開場している。席料は20もしくは10セントボと格安であった。主にエジソンやルービン、ヴァイタグラフなどMPPCのアメリカ映画を上映していた。

#### ◆リザル劇場 Rizal Theater

バート・イヤースリイのオリエンタル映画社が経営していた劇場のひとつ。アンロアケ通り（Anloaque, 現在のホワン・ルナ Juan Luna）にあった。遅くとも1911年9月までには開場している。席料は40-30-20-10セントボ。主にエジソンやヴァイタグラフなどMPPCと、IMPなどインディペンデントのアメリカ映画を上映していた。

#### ◆ゲイエティ劇場 Gaiety Theater

エルミタのリアル Real 通り630番地、ハランに近いソルダド Soldado 通りの辺りにあった劇場である。1912年1月16日まではヴォードヴィルと映画と一緒に興行していたが、18日以降は映画専門となる。席料は50-40-20セントボであった。

この劇場は、すでに映画館が乱立したあとに開場したためか、上映時間の提示方法に工夫が施されている。開場時間は、マチネー興行をする欧州系のアポロやアイディアルとも、演劇時代の慣例から上映開始を7時台に設定するアメリカ系のエンパイアやソリーリヤ、マジェスティックとも異なり、その間をとった6時台であった。しかも、各プログラムの上映所要時間と開始時間が分刻みで示されている。たとえば「6時42分、8時42分、10時32分、各40分」<sup>9)</sup> というようにである。おそらく、会社員など近代的な時間労働者に配慮した興行であったと考えられる。

上映映画は、アメリカ映画と欧州映画の混成である。欧州映画は、デンマー

クのノルディスクやイギリスのヘップワース、フランスのパテなどが多い。他方、アメリカ映画は、ヴァイタグラフ、バイオグラフ、エッサネイ、セリグなどMPPCのライセンス映画がほとんどであったが、しだいにタンハウザーやIMP、キーストーンなど非ライセンス映画も上映するようになる。こういった新開場の豪華劇場が積極的にアメリカ映画を上映していたことから、マニラ映画市場でアメリカ映画の人気の高まっていった様子が窺われる。

### 3 マニラ市場と20世紀初頭の世界映画配給網

前述したアポロ劇場支配人による1910年12月の記事によれば、フィリピンの首都マニラには、フランス、パテ社の代理店しかなく、上映される映画はすべて「パテ映画」であったという。この記事を引用して映画研究者ニック・デオカンポは、フィリピンがアメリカの植民地であったにもかかわらず、1910年までマニラにパテ社の代理店しかなく、パテ社が市場を独占していたのは、アメリカが統治するようになってもしばらくは「ヒスパニック文化」が浸透していたからだと述べる<sup>10)</sup>。

しかし、ここで注意すべきは、パテ社による市場支配は、マニラに限ったことではないということである。20世紀初頭には、シンガポールや中国、日本などアジアの多くの国や地域——ヒスパニックであろうとなかろうと——で起こっていたのである。したがって、パテ社がマニラ市場を独占支配していたのは、「ヒスパニック文化」の浸透よりむしろ、もっと別の要因があったと考えた方がよいだろう。それが物流である。

20世紀初頭、今からは想像しがたいことだが、世界の映画取引の中心はイギリスのロンドンであった。それは当時のイギリスが世界の物流の要である海運を支配していたからである。島国であるイギリスには昔から船がたくさんあった。欧州との貿易も盛んで、海運業が早くから発達した。イギリスの経済学者エドガー・クラモンドの『英国海運業』*The British Shipping Industry*によれば、1913年のイギリス船の積載量は、アメリカで42.1%、アジアで43.5%、アフリカで40.6%、オーストラリアで68.3%を占め、世界の海上運送のおよそ半分を

イギリスが占めていたという<sup>11)</sup>。とりわけ、アジアやオーストラリアなど、遠隔地ほどイギリス海運業のシェアは高く、1913年にスエズ運河を通過した船の60.2%はイギリス船であった(1894年は74.6%)。飛行機のまだない時代ゆえに、海上交通を支配していたイギリスが、当然ながら世界の物流、そして金融の中心となったのである。

したがってアジアで上映される映画の多くは、ロンドン市場から、アジア欧州航路の船でスエズ運河を経由して、アジアに運ばれていた。アメリカ映画も、その例外ではなかった。現在のわれわれから見れば大変な遠回りであるが、20世紀初頭においてアメリカ映画は、アメリカ西海岸からアジアではなく、アメリカ東海岸から大西洋を横断して、イギリスにわたり、イギリスからアジアに運ばれていたのである。アメリカ商務労働省の報告書『デイリー・コンシュラー・アンド・トレード・レポート』*Daily Consular and Trade Reports*の1907年4月17日号に掲載された、シンガポール総領事デイヴィッド・F・ウィーバーの巻頭記事「American Trade in the Orient」からは、20世紀初頭のマニラとアメリカを結ぶ流通状況を窺い知ることができる。以下に、その要約を記す。

アメリカの対アジア貿易を強化するには、ニューヨークからマニラへ、今より早く到着する定期便が必要である。ニューヨークを出発した船はマニラに向かう途中、インドやペナン、シンガポールに寄港し、そこからアメリカ製品がシャム、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、オランダ領の島々および南フィリピンへと運ぶ。

「外国の資本」がアメリカ製品のために定期便を就航するはずはないので、アメリカは現行サービスを利用するしかない。しかし現行サービスでは、現状は維持できても、それ以上の発展は望めない。むしろ「世界のその部分」にアメリカ製品のシェアを拡げる妨げになっている。アメリカは今、すごい勢いで物を大量生産している。よっていずれ、その製品のはけ口としてアジア市場が必要になるだろう。そのときアメリカが他国に打ち勝つには、インフラを整えておく必要がある。輸送手段の



改善は、そのもっとも重要なインフラのひとつである。また、アメリカの現地代理店も必要だ。ただし、現在のアメリカ－アジア間の輸送手段が改善されない限り、アメリカ企業が現地に代理店を開業する気にはならないだろう。

「外国の資本」とは主にイギリスを、「世界のその部分」はフィリピンにいたるまでのアジアの国や地域を指す。要するに、ウィーバーは、アメリカがアジア市場を開拓するには、アメリカからイギリス、そしてスエズ運河を経由してシンガポール、さらにその先のマニラに向かう定期運航便が必要だと主張しているのである。アメリカからアジアではなく、アメリカからイギリス経由でアジアへ向かう船が重要であった。こうした状況ゆえに、アメリカ映画のアジア市場開拓はなかなか進まなかったのである。

このイギリス中心の海上ネットワークをいち早く利用して、世界初のグローバル映画配給を実現したのが、フランスのパテ社である。パテ社は、1902年にロンドンに進出し、1906年には世界に先駆けて映画配給のグローバル化を進め、アジアにも1907年に欧米の映画会社として初となる代理店をイギリス植民地であったシンガポールに置く。そして、そのシンガポールからマニラや香港、東京などアジアの主要都市にその配給の網目を伸ばしていった。こうしてアジア映画市場は、パテ社による地球規模の配給ネットワークにからめとられるのである。

マニラにおいてパテ社は最初、パテ社の製作した映画を主に配給していたが、映画興行が盛んになり、供給量が増えると、しだいに他社の映画も配給するようになる。たとえば、フランスのフィルム・ダールやゴーモン、イギリスのアーバンやヘップワース、イタリアのアクイラ、アメリカのエジソンやヴァイタグラフなどの映画である。ただしアメリカ映画の場合は、欧州映画に比べ、封切公開から1、2年、時には3年以上も遅れることがままあった。つまり、アメリカ映画は欧州映画と比べ、より使い古された、より状態の悪い中古映画が多かったのである。それは先ほど述べたように、アメリカ映画は、大西洋をわ

たってイギリスに運ぶ時間と費用が重み、欧州映画より割高となるため、資金力の乏しいアジア市場では、より古い映画を上映せざるをえなかったからだと考えられる。

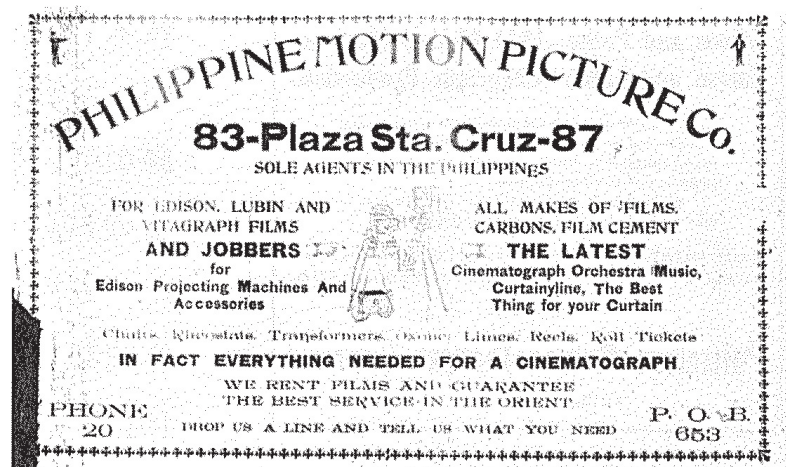
こうしてアメリカの植民地であるマニラのスクリーンはほぼ、パテ社の配給する映画——欧州映画とアメリカの MPPC 映画——によって占有されるのである。

#### 4 マニラにおけるアメリカ映画の台頭

1911年6月10日号の『ムーヴィング・ピクチャー・ワールド』に掲載された J・J・ロビンソン J. J. Robinson の記事（4月28日投稿）よれば、当時マニラには計10社の映画供給会社があったという。その10社を以下に記す。

- ①パテ社マニラ代理店
- ②バルセロナに本社がある会社のマニラ代理店
- ③ゴーモン社の半代理業者
- ④香港の半代理業者
- ⑤ヴァンクーバーの半代理業者
- ⑥欧州とアメリカの両方で事業展開する会社
- ⑦アメリカ映画を貸出す会社が4社

これを前述したアポロ劇場支配人の記事と比較すると、いかに映画供給会社が増えていたかがわかる。他と比べて、⑦のアメリカ映画を扱う会社の情報は具体性を欠いているが、その点にマニラ映画市場における



フィリピン映画社の広告  
(The Manila Times, Dec. 15, 1910)

欧強米弱の状態を見ることもできよう。

だが、ここで疑問なのは、もしこれらの記事が正しいならば、マニラに映画を供給する会社は、1910年12月の時点ではパテ1社しかなかったが、そのわずか半年後に10社に急増したことになる。もちろん、ありえないことではない。しかし、事実はそうではない。

まず、1910年12月の時点でのマニラの映画供給者は、パテ社のみではなかった。たとえば1909年11月には、アメリカ映画社 American Cinematograph Company という供給会社が、オペラなどを上演していた高級劇場ソリーリャにアメリカ映画を供給していた。また、前述したアイディアル映画社も、1910年12月までには設立されており、アイディアルやメトロポリタン、マガリャネスなどの劇場に映画を供給していた。同じく1910年12月、エジソン製の装置およびエジソンやルービン、ヴァイタグラフの映画を扱うフィリピン映画社 Philippine

Motion Picture Company がプラザ・サンタ・クルーズ83-87番地に設立されていた<sup>12)</sup>。つまり、アポロ劇場支配人の発言に反し、1910年12月時点でマニラには、複数の映画供給者が存在していたことがわかる。

1910年に、すでに複数の映画供給者が営業し、うち何社かはアメリカ映画を専門に供給していたとすれば、アメリカ映画が勢いを増して欧州映画にとって代わるのはいったいいつだったのであろうか。先行研究によれば、マニラに代理店を開業した最初のアメリカ映画会社は、1911年、ルービン社であったという。たとえば、映画研究者クリスティン・トンブソンは1911年にルービン社がマニラに

**Edison Jobber of Kinetoscopes**



**BERT YEARSLEY**

**L**ARGEST  
EADING  
ICENSED  
FILM

DEALER IN THE  
ORIENT

**Machines,  
Films.**

**Edison and Pathe, 1911 Models Machines  
Edison and Lubin Vitagraph Productions**

La mejor maquina conjuntamente con el mejor servicio produce los mejores resultados como tambien mayor cantidad de dinero. Adelante con el tiempo y comprar una de estas maquinas.  
El Modelo B del Kinetoscope de Edison es la más recién de las Máquinas Cinematográficas.

**Suministraremos todo lo necesario  
para el negocio de Cinematografia.**

**PHILIPPINE MOTION PICTURE COMPANY**  
87 PLAZA SANTA CRUZ

フィリピン映画社の広告  
(*The Philippines Monthly*, Feb., 1911, p. 64)



代理店を開くと公表したと述べる。また、デオカンポは1911年にアメリカの会社として初めてルービン社がマニラ代理店を開いたが、長く続かなかったと述べている<sup>13)</sup>。アメリカの大会社進出は、パテ社進出に匹敵する大きな変化を引き起こしたと考えられる。だが、残念ながら両者とも、主張の根拠となる史料を明示していない。今回の調査でも、ルービンのマニラ代理店の存在を示す史料は見つからなかった。強いていえば、『フィリピン・マンスリー』*The Philippines Monthly*の1911年2月号にルービン社の映画を扱うフィリピン映画社の広告が見つかったにすぎない<sup>14)</sup>。

もしこれが彼らの主張するルービン社のマニラ代理店の根拠となる史料であるならば、彼らはルービンだけでなく、エジソンとヴァイタグラフも指摘してしかるべきであろう。しかし、それはない。ゆえに彼らには、他に根拠となる史料があるはずだが、その典拠が示されない限り、ルービン社のマニラ上陸1911年説は見直す必要がある。

また、これまで定説とされてきた、アメリカ映画がマニラ市場を支配するのは、第一次世界大戦末期、もしくは大戦後であるという先行研究の主張も、見直す必要がある。トンプソンとその後続のアメリカ研究者らは、アメリカ映画は第一次世界大戦末期にアジア市場に進出し、欧州から覇権を奪ったと主張する。また、デオカンポも、アメリカ映画がマニラの市場を支配したと感じられるようになるのは1920年代であるという<sup>15)</sup>。ただ、彼らは具体的に、いつ、どのように、アメリカ映画がそのシェアを伸ばしていったのかは明らかにしていない。

しかし、マニラにおける映画館とその配給興行を調査した結果、アメリカ映画の公開は1910年代初頭からすでに盛んになり、大きな興行勢力に成長していくことがわかった。マニラにおけるアメリカ映画の上映はまず、1909年末、アメリカ人興行師のバート・イヤースリィがエンパイアを開場し、アメリカ映画を定期的に上映することからはじまる。そしてそのエンパイアに対抗して、1910年2月、ソリーリャがアメリカ映画専門の映画館に転身する。こうしてエンパイアやソリーリャというマニラ初の豪華な映画館の登場により、アメリカ

映画はマニラにおける市民権を獲得するのである。

エンパイアとソリーリヤの開場後、関を切ったように映画館が次々開場するが、そのうちマジェスティックやロイヤル、ゲイエティといった劇場がアメリカ映画を積極的に上映する。とくにマジェスティックは、エンパイアやソリーリヤに勝る、マニラ随一の豪華劇場であった。一方、アポロやアイディアルなど欧州映画を専門とする映画館も、アメリカ映画を混ぜて上映していた。上映されるアメリカ映画は基本 MPPC 映画である。最初はエジソンやヴァイタグラフが多かったものの、しだいにエッサネイやセリグ、カレムが増えていく。

ところが1913年7月、アメリカ映画といえばMPPC映画がほとんどであったマニラの映画市場が大きく変わる。IMPやパワーズなど、MPPCに反旗を翻したインディペンデント系の映画が急増するのである。これらの新しいアメリカ映画は、1910年の末頃からすでに、少しずつではあるが、ロイヤルやアポロ、アイディアルなどで上映されはじめていた。だが、1913年7月1日、エンパイアがニューヨーク・モーション・ピクチャー社のチャールズ・ギブリンとトーマス・インスが共同監督した大作『大決戦』*The Battle of Gettysburg* (1913)を興行すると、流れは一変する。クリスタルやネスター、ソラックス、バイソン、IMPといったユニヴァーサル社ブランドの映画が次々上映されるようになるのである。こうしてマニラを代表する映画館のスクリーンは、アメリカのインディペンデント映画によって占領されることとなり、MPPC映画の影は一気に薄くなる。

エンパイアによる『大決戦』の興行はさまざまな面で画期的であった。この南北戦争を描いた5巻物の大作映画は、新聞一面を使った派手な新聞広告を打つなど、鳴り物入りで興行された。アメリカでは1913年6月1日に公開されたが、マニラ公開は、そのわずか1か月後であった。この時間差からわかるのは、この映画が、イギリスではなく、アメリカから直送されていたことである。つまり、この映画は明らかに、従来のマニラ映画市場に出回っていた中古のアメリカ映画とは異なっていたのである。アメリカ直送の摩耗していないアメリカ映画が、それまでとは比べ物にならないほど美しいイメージをスクリーンに映

し出したことは確かである。これがマニラ映画市場に新しい風を吹き込むことになる。

エンパイアはこのとき、その興行形態も一新している。席料は、50-40-20セントボの3段階から、より大衆的な料金である50-20セ

**THE EMPIRE THEATRE**  
**CALLE ECHAGUE**  
UNIVERSAL PROGRAM No. 48.  
For January 12, 13 and 14, 1914.

Exhibits nothing but BRAND NEW FILMS direct from the States. Comprehensible, interesting short comedies and complete two-reel dramas,—a specialty.

1. **Like Darby and Joan—Dramatic.**
2. **Willie's Great Scheme—Comic.**
3. **FIGHTERS OF THE PLAINS**  
(1st Part—Sensational Drama of War and Adventure)
4. **FIGHTERS OF THE PLAINS**  
(2nd Part—Sensational Drama of War and Adventure)
5. **THEIR PARENTS—Comedy Drama.**

Feature for Thursday:  
**The Daredevil Mountaineers—2 Parts.**

上映映画はユニヴァーサル社ブランドの映画  
(*The Manila Times*, Jan. 14, 1914)

ンタボ、あるいは50-10セントボの2段階とする。上映時間も7時30分から11時までという曖昧な表示はやめて、3時と7時と9時というように、上映回毎の開始時間を明示する。つまり、ヴォードヴィル時代の興行の慣例を改め、より時間効率よく、より気軽に楽しめるよう興行形態を刷新しているのである。

こうしたアメリカ映画優勢の流れをさらに決定的にしたのが、エンパイアのユニヴァーサル社との独占的契約である。1914年1月12日付の『マニラ・タイムズ』に掲載された広告には、エンパイアの上映映画はすべてアメリカ直送と謳われている。そしてその日から、「ユニヴァーサル・プログラム」Universal Program など、上映映画はユニヴァーサル社ブランドのみとなる。また、ユニヴァーサル社の人気連続映画も、すべてエンパイアで上映された。『国賓』*Lucille Love: The Girl of Mystery* (1914) は本国から約4か月遅れ、『マスター・キー』*The Master Key* (1914) は約6か月遅れで、『名金』*The Broken Coin* (1915) は約4か月遅れであり、これは、シンガポールなど他のアジアの主要都市よりずっと早い<sup>16)</sup>。

そして1914年末までには、エンパイアの他に、ゲイエティはもちろん、ずっとパテ映画を専門にしていたラックスさえもが、キーストン・スタジオやヴァイタグラフ、セリグなどアメリカ映画を目玉に興行しはじめる。こうしてマニラを代表する映画館の興行は、ほぼアメリカ映画に支配されることになる。



以上、パテ社が上陸し、エンパイアとソリーリャが映画興行を開始したあと、マニラに開場した映画館の存在とその興行を明らかにした。誤解のないよう断っておくが、当然、新聞に広告を出すような比較的大きな映画館以外にも、演劇やスポーツなどの劇場、あるいは場末の小さな映画館でも映画は上映されていたことは確かである。だが、そういった興行場の調査は、新たな史料が発見されない限り、ほぼ不可能に近い。

ゆえに本研究では、『マニラ・タイムズ』など一次資料を用いて、マニラ映画市場の変容を読みとろうとした。その結果、草創期のマニラ映画興行に関する様々な状況が明らかになった。たとえば、最初は市場をパテ映画が独占していたものの、すぐにアメリカ映画専門の劇場が誕生し、1910年代初頭にはアメリカ映画が積極的に上映されていたこと。そして1914年初頭までには、ユニヴァーサル社が上陸し、アメリカ映画の優勢を決定的にしたこと。しかもその変化は他のアジアの地域より早く、大戦前にすでに起こっていたことなどである。そしてそれはちょうどアメリカ映画産業の中心が東海岸から西海岸に移り、新しい映画の都・ハリウッドが形成される時代と重なるのである。

## 5 結語

パテ社の代理店開業によりマニラに映画館の開場ラッシュが起こる1909年から、ユニヴァーサル社がエンパイアと独占的興行契約を結んでマニラに本格的に上陸する1914年までの、マニラ映画市場の変容を辿ってきた。

地球全体を俯瞰して見ると、マニラ市場は、シンガポールや日本などアジアの多くの大都市と同じく、パテ社やユニヴァーサル社といった世界規模の映画会社が進出し、そのグローバルな配給網に接続されることで、大きな変容を経験していたことがわかる。しかし同時に、マニラの変容は、アジアの他の国や地域と比べて、その様相を異にしていたのもまた事実である。たとえばユニヴァーサル社の進出を見ても、マニラ進出は最も早くて1913年夏から1913年末頃と考えられるが、それはシンガポールの1915年10月、東京の1916年7月と比べて、およそ2年から3年は早い。

デオカンボは、1910年代のマニラでは、アメリカ統治下とはいえ欧州文化の影響が強く、欧州映画が市場を独占していたため、アメリカ映画の台頭は第一次世界大戦後の1920年代と述べる。また、トンプソンもアメリカ映画がアジアに台頭するのは1918年とみなす。しかし、『マニラ・タイムズ』を調査した結果、アメリカ映画の台頭は、1910年代初頭にはじまり、第一次世界大戦直前にはすでに、相当大きな勢力に成長していたことがわかる。それはもはや対抗でも拮抗でもなく、凌駕である。そして、その凌駕に重要な役割を果たすのが、エンパイアやマジェスティック、ロイヤルといったアメリカ人経営者による劇場であり、その劇場に通う富裕層やエリート層、在マニラのアメリカ人を主とした家族や軍人たちであった。

マニラの映画文化の形成期は、フィリピンの統治がスペインからアメリカの手にわたり、旧文化と新文化が混ざりながら、その比重が徐々にアメリカ寄りにシフトしていく時期と重なるがゆえに、そのあり様はアジアの他の国や地域とは異なっていた。1910年初頭にアメリカ映画の上映が増加していったのも、アメリカ軍人とフィリピン娘の恋を描いた『フィリピンの薔薇』のようなアジアを題材にした映画がいち早く上映されたのも、英語教育の浸透や、アメリカの統治下で増えていった在マニラのアメリカ人が関係する。また、マニラにおける映画の興行形態が映画館によって一様でなかったのは、スペインなど欧州の文化とアメリカの文化、そして土着の文化が複雑に折り重なるマニラの歴史的背景抜きに考えることはできない。

このように20世紀初頭のマニラにおける映画文化の歴史を踏えるならば、アジア映画市場におけるアメリカ映画の台頭も、これまで言われてきた「第一次世界大戦末期」あるいは「大戦後」といった画一的な線引きで叙述するのは不可能であることがわかる。フィリピンの映画興行史は、まさにそういったアジアの映画文化の多様性、多層性を示す証左といえよう。

現代の研究者は、かつての研究者と比べ、アーカイヴやネットなどの恩恵ゆえに、一次史料をより容易に調査でき、その分、より広い視野からの歴史研究が可能である。われわれは、その恩恵を真摯に受けとめ、先行研究に敬意を表

しつつ、その成果を検証し、先行研究とは異なる地平を切り開くことに挑戦する必要がある。そのためには、単なる先行研究の穴埋めや応用に終始せず、つねに別の角度から歴史を見直す努力を重ねることが重要である。もちろん、膨大な時間をかけた先行研究の検証や問い直しは、簡単なことではない。しかし、歴史は叙述であり、永遠に変らない歴史はありえないのであれば、既存の視点に拘わりすぎて、新たな視点を提示することを恐れてはならない。つねに、さまざまな可能性を模索し続けること、それこそ歴史を研究する者の目指すべき態度であろう。そしてそこにこそ、歴史に挑む喜びはある。

#### 謝辞

調査にあたり、フィリピン研究の京都大学清水展教授、ならびに京都大学東南アジア研究所図書室の方々に様々な便宜をはかって頂いた。厚く御礼を申し上げたい。

#### 注

- 1) Thompson, Kristin, *Exporting Entertainment: America in the World Film Market 1907-1934*, London: British Film Institute, 1985. ; Deocampo, Nick, *Film: American Influences on Philippine Cinema*, Manila: Anvil Publishing, 2011.
- 2) MPPC (1908-1918) は、エジソン社やバイオグラフ社など映画関連の特許を持つ映画会社がアメリカ市場の映画の製作や配給、興行を独占すべく組織したトラストである。メンバーは、エジソン社、バイオグラフ社、エッサネイ社、カレム社、ルービン社、セリグ社、ヴァイタグラフ社といった7つのアメリカの映画会社と、フランスのパテ社とスター・フィルム社のアメリカ法人、そして外国映画輸入業のジョージ・クライン社の計10社であった。このMPPCが組織されたあと、IMPやニューヨーク・モーション・ピクチャー社など映画会社が多数新設され、MPPCと争うようになる。当時アメリカではMPPCメンバーの製作映画をライセンス映画、非メンバーの製作映画を非ライセンス映画と呼んだ。IMPなど非メンバーの映画会社は、MPPC映画の全国配給組織General Film Companyに対抗して、ユニヴァーサル社やミューチュアル社といった全国配給組織を作り、MPPCの市場独占を阻止し、MPPCを解散に追い込む。
- 3) 笹川慶子「パテ社のマニラ進出と映画館——マニラ映画興行史 1909-1910」『演劇研究』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、第40号、2017年3月刊行予定。
- 4) Frankel, H., "The Apolo Theater, Manila," *The Moving Picture World*, December 3,



1910, p. 1304.

- 5) Nellist, George F. (ed.), "Alberto y Araullo, Vicente G.," *Men of the Philippines: A Biographical Record of Men of Substantial Achievement in the Philippine Islands*, vol. 1, Manila: The Sugar News, 1931, p. 9.
- 6) *The Moving Picture World*, October 24, 1914, p. 468.
- 7) *The Moving Picture World*, October 24, 1914, p. 468.
- 8) *The Moving Picture World*, October 24, 1914, p. 468.
- 9) *The Manila Times*, May 3, 1912.
- 10) Deocampo, p. 170, p. 172.
- 11) Edgar Crammond, *The British Shipping Industry*, London: Constable and Company Limited, 1917, pp. 26-27.
- 12) *The Manila Times*, December 15, 1910.
- 13) Deocampo, p. 175, p. 234.
- 14) "Philippine Motion Picture Company," *The Philippines Monthly*, vol. 11, no. 4, February, 1911, p. 64.
- 15) Deocampo, p. 174.
- 16) たとえば、「マスター・キー」の第一話公開は、アメリカが1914年11月16日、マニラが1915年5月28日、東京が1915年9月30日であり、マニラが東京より4か月ほど早い。ただし、「名金」だけは事情が異なる。アメリカは1915年6月21日、マニラは同年10月28日、東京は同年10月10日で、東京の方が2週間ほど早い。それは「名金」は、ユニヴァーサル社の東洋総支配人としてアジアの市場開拓に乗り出したトム・D・コクレンが自ら各国を歴訪しながら配給したため、通常の配給ルートと異なっていたからだと考えられる（笹川慶子「トム・D・コクレンとアジア——ユニバーサル映画のアジア展開」『関西大学文学論集』関西大学文学会、2015年7月、131-157頁）。